

2017年 1月 26日
塩野義製薬株式会社
日本イーライリリー株式会社

－ 変形性関節症の痛みに対する患者・医師の意識・実態調査 －

6割超が、変形性関節症に伴う痛みで家事に支障がある

患者の7割超が、痛みが最もひどい時期には、週2-3日以上頻度で家事に支障あり

長引く治療、4割超が1年以上、約2割は3年以上、通院を継続

治療目標設定で高まる患者の満足度

医師と治療ゴールを設定した患者の8割以上が満足と回答

医師・患者間コミュニケーションの重要性を示唆

塩野義製薬株式会社(本社:大阪市中央区、代表取締役社長:手代木 功)と日本イーライリリー株式会社(本社:神戸市中央区、代表取締役社長:パトリック・ジョンソン)は、2016年12月、膝に痛みのある変形性関節症患者さま516名^{*1}、変形性関節症の治療経験のある整形外科医110名^{*2}を対象とし、変形性関節症の痛みに対する意識・実態に関するインターネット調査を実施いたしました。

変形性関節症は、膝関節や股関節、足関節などによくみられます。中でも、診断上の患者数が2,530万人^{*3}と推定される変形性膝関節症は、40歳以上で男性42.6%、女性62.4%^{*3}と非常に有病率が高いことがわかっています。変形性関節症に伴う疼痛は、関節の炎症そのものによる直接的な痛みだけでなく、その痛みの持続的な刺激によって起こり、痛みを和らげる神経系(下行性疼痛抑制系)の機能減弱も原因の一つと考えられています^{*4}。変形性関節症のような慢性疾患による長引く痛みは、睡眠や仕事、日常生活に影響を及ぼし、QOLの低下へ繋がる可能性があります^{*4}。

そこで今回、変形性関節症に伴う痛みが生活にどのような影響を及ぼすのか、特に症状の出やすい膝に痛みのある患者さまを対象とした調査を実施するとともに、治療実態についても明らかにすべく、患者さまと医師双方へ調査をおこないました。

その結果、普段家事をしている患者さまの6割超が、変形性関節症に伴う痛みによって、家事に支障があると回答しました。最も痛みがひどい時期には、週2-3日以上支障があると7割超が回答しており、痛みにより「普段の自分でいられない」と感じている患者さまが5割超いることがわかりました。このように、変形性関節症に伴う痛みが、患者さまの日常生活に支障をもたらしている可能性が示唆されました。

また、4割超の患者さまが1年以上、約2割の患者さまが3年以上、通院を継続していることがわかりました。

一方で、医師に治療法について説明を受け、治療目標を設定した患者さまの治療満足度は8割超と高く、医師とのコミュニケーションが治療満足度を高めるために重要であることが示唆されました。

今回の調査の主な結果は次頁以降の通りです。詳細なデータは両社ウェブサイトに掲載しております。

*1: 20歳以上男女/医療機関で変形性関節症と診断され、現在治療中または治療を行っていた方、且つ、医療機関を受診した際、変形性関節症による痛みの症状が膝にあった方

*2: 変形性関節症の治療経験のある整形外科医 *3: Yoshimura, N. et al.:J.Bone Miner. Metab., 2009, 27(5), 620

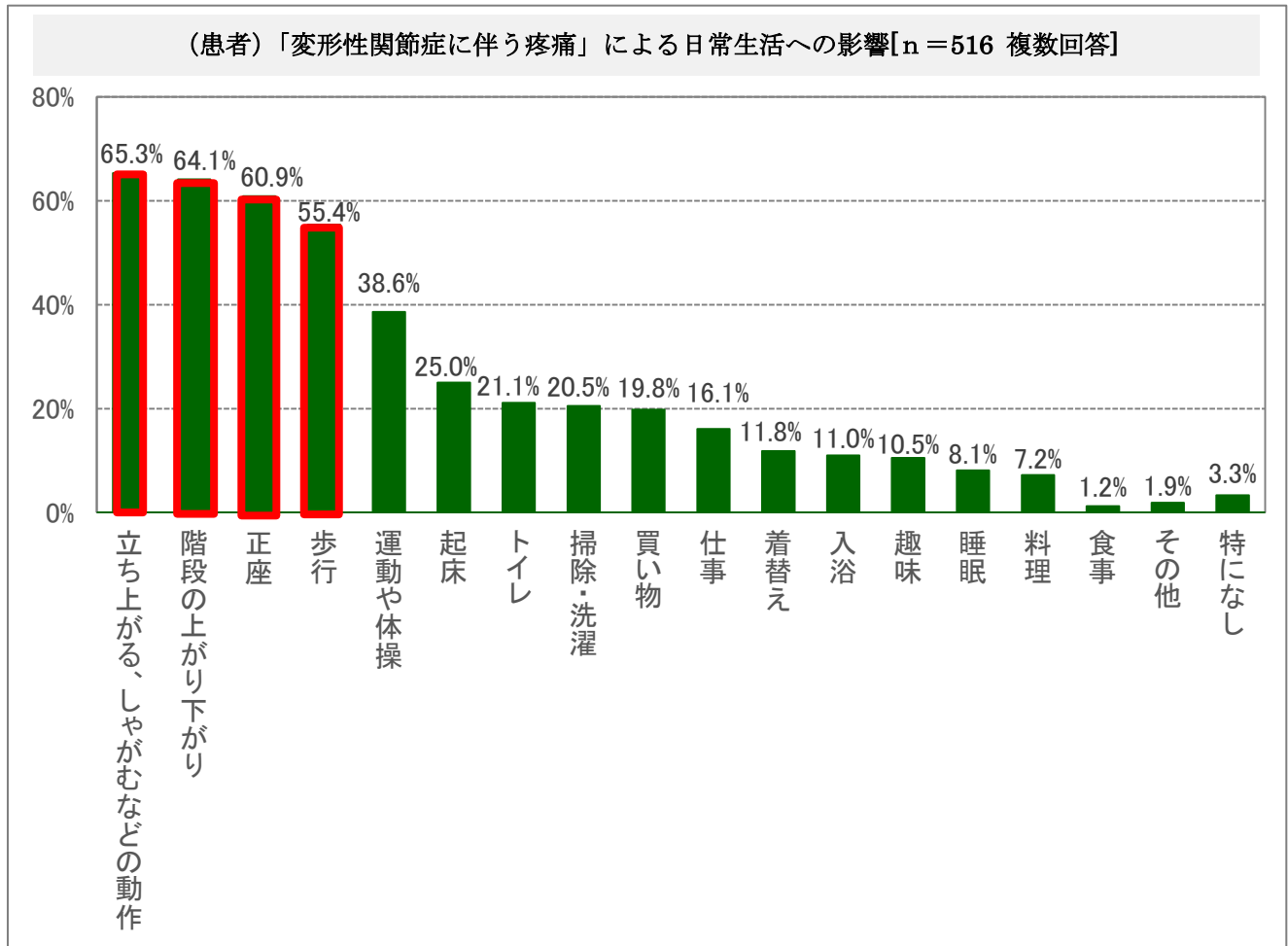
*4: 矢吹省司ほか: 臨床整形外科, 2012, 47(2), 127

1. [変形性関節症患者の生活実態について]

1-1. 日常生活への影響—96.7%が変形性関節症に伴う痛みで、日常生活に何らかの支障があると回答

患者さまの日常生活へ与える影響について調査したところ、96.7%が「何らかの支障がある」と回答しました。具体的には、「立ち上がる、しゃがむなどの動作」(65.3%)、「階段の上がり下がり」(64.1%)、「正座」(60.9%)、「歩行」(55.4%)でした。

変形性関節症に伴う痛みが、患者さまの日常生活に様々な支障をきたしている可能性が示唆されました。



1-2. 家事への影響—普段家事をしている患者の62.2%が、変形性関節症に伴う痛みで家事に支障あり

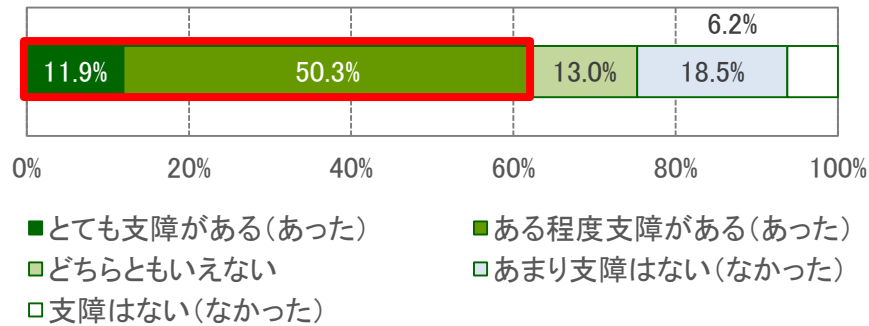
痛みが最もひどかった時期の家事に支障をきたす頻度は、「毎日」または「週2-3日」と71.6%が回答

普段家事をしていると回答した453人に対して、「変形性関節症に伴う痛みで、掃除・洗濯・料理などの家事に支障がありますか」と質問すると、62.2%が「とても支障がある(あった)」「ある程度支障がある(あった)」と回答しました。

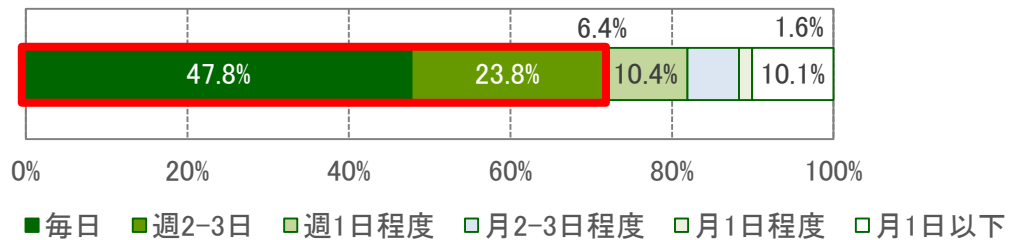
また、家事に支障はあるかとの質問に対して「支障はない(なかった)」と回答した人以外の425人に対して、「変形性関節症に伴う痛みが最もひどかった時期の、掃除・洗濯・料理などの家事に支障をきたす頻度」について聞くと、毎日・週2-3日・週1日程度が、それぞれ47.8%・23.8%・10.4%でした。

変形性関節症に伴う痛みによって、多くの患者さまが家事に支障をきたしている可能性が示唆されました。

(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」による家事への影響[n = 453 単一回答]



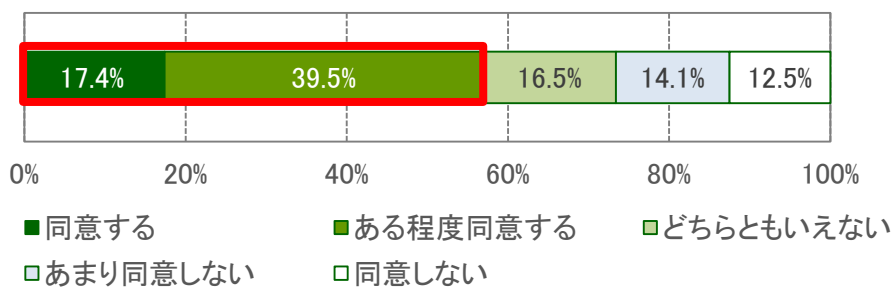
(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」が最もひどかった時期の家事へ支障をきたす頻度 [n = 425 単一回答]



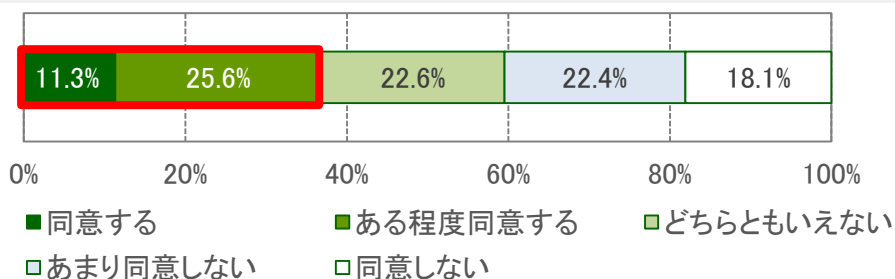
1-3. 周囲とのコミュニケーションへの影響—56.9%が、「普段の自分でいられない」

家事に支障はあるかとの質問に対して「支障はない(なかった)」と回答した人以外の425人に対して、「変形性関節症に伴う痛みで、普段の自分でいられないと思うことがありますか」と聞くと、56.9%が「同意する」「ある程度同意する」と回答。「変形性関節症に伴う痛みで、いつものように近所づきあいができないと感じることがありますか」と質問すると、36.9%が「同意する」または「ある程度同意する」と回答しました。

(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」で普段の自分でいられないと思うことがあるか [n = 425 単一回答]



(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」でいつものように近所づきあいができないと感じることがあるか [n = 425 単一回答]



2. [変形性関節症に伴う痛みの治療に関する患者の実態について]

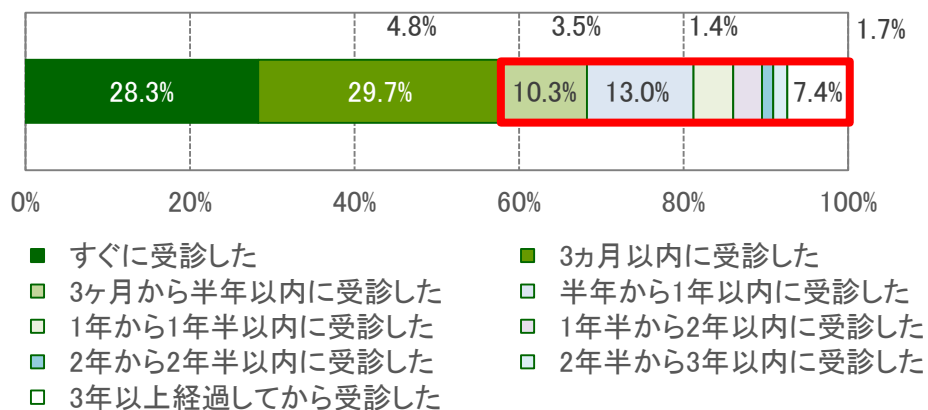
2-1. 痛みを感じてもすぐに受診しない実態—42.1%の患者が、受診までに3ヵ月以上かかっている

「関節に痛みを感じてから、変形性関節症に伴う痛みで医療機関の受診をするまでに、おおよそどれぐらいの期間がありましたか」と質問すると、42.1%が「3ヵ月以上」と回答しました。

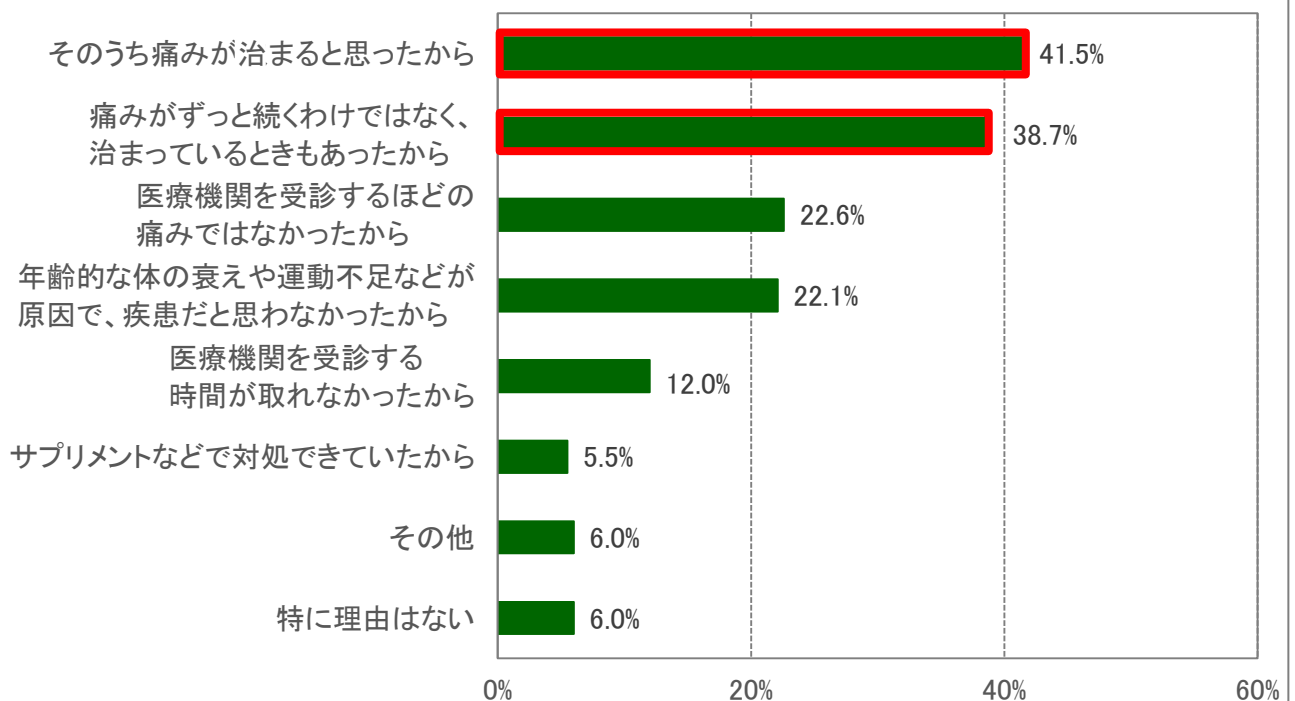
その理由として、そのうち痛みが治まると思ったから(41.5%)、あるいは痛みがずっと続くわけではなく、治まっているときもあったから(38.7%)などと回答しました。

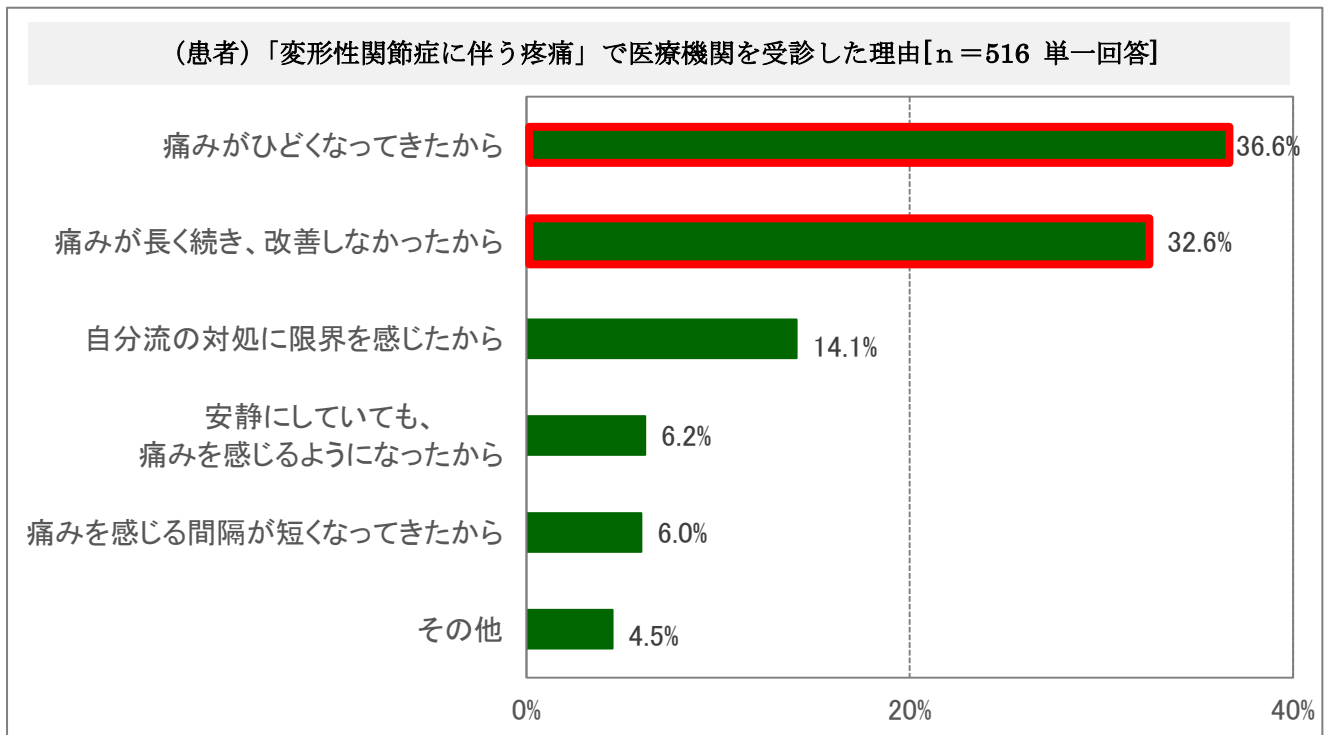
一方で、「変形性関節症に伴う痛みで医療機関を受診した理由」を尋ねると、痛みがひどくなってきたから(36.6%)、あるいは痛みが長く続き、改善しなかったから(32.6%)と回答しました。

(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」で医療機関を受診するまでにかかった期間 [n = 516 単一回答]



(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」で医療機関を受診するまでに時間がかかった理由 [n = 217 複数回答]



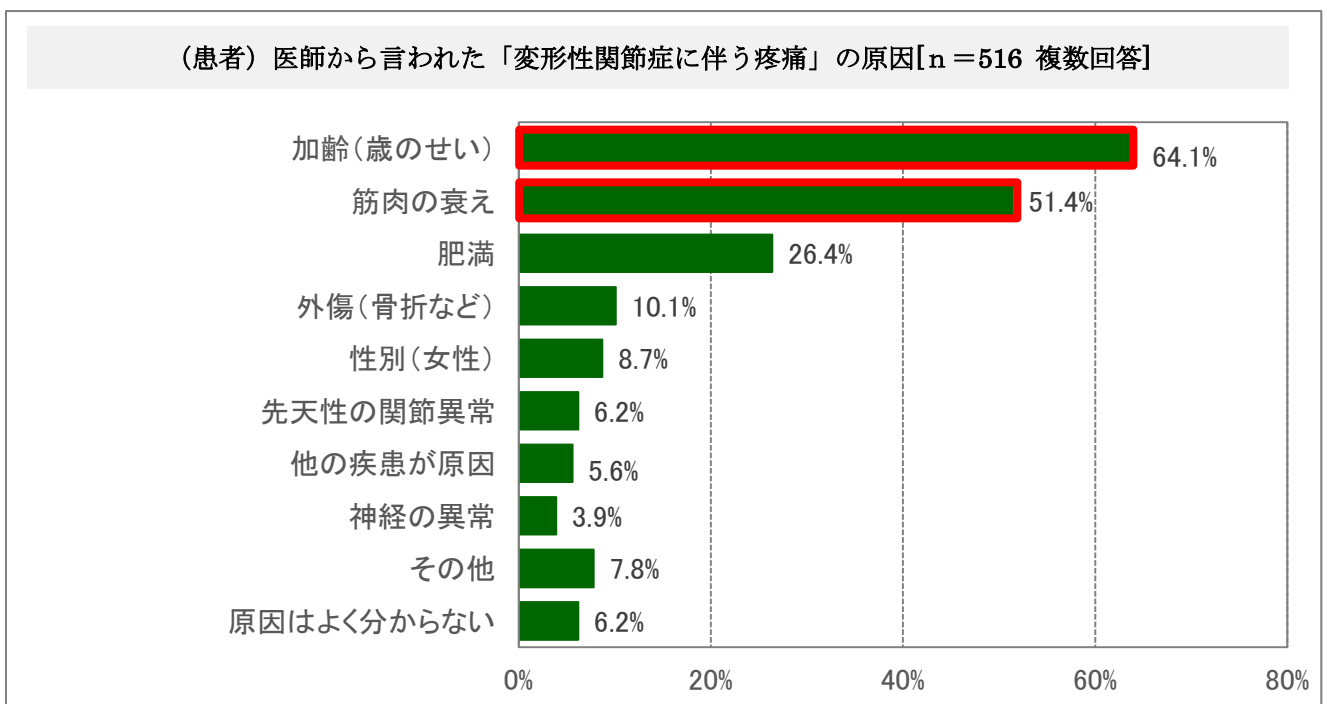


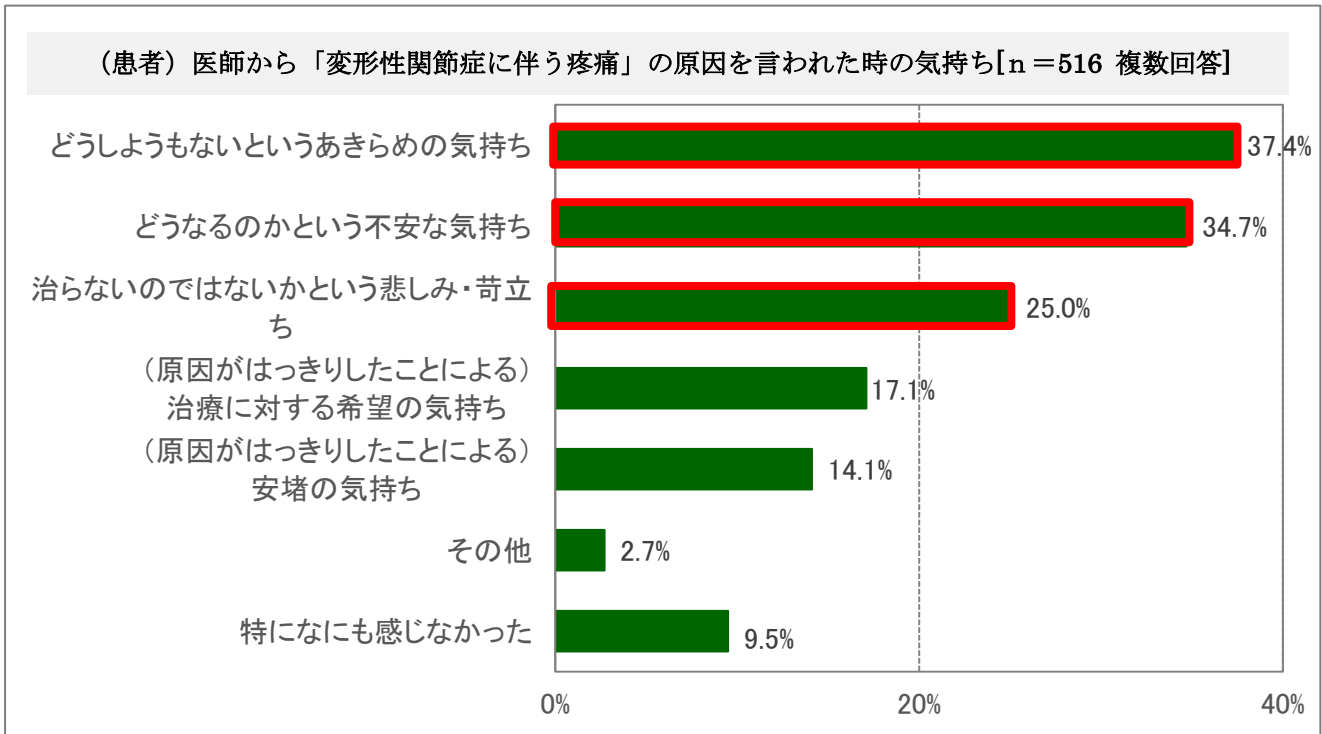
2-2. 医師から伝えられた痛みの原因は「加齢」(64.1%)、「筋肉の衰え」(51.4%) —原因を伝えられた時の気持ちは、治療への期待・希望よりも、「あきらめ、不安、悲しみ・苛立ち」

「医師から、変形性関節症に伴う痛みの原因を何だと言われましたか」と質問すると、「加齢」(64.1%)、「筋肉の衰え」(51.4%)の回答が最も多くなっていました。

また、「医師から変形性関節症に伴う痛みの原因を言われた時の気持ちを教えてください」と尋ねると、上位から、どうしようもないというあきらめの気持ち(37.4%)、どうなるのかという不安な気持ち(34.7%)や、治らないのではないかと悲しみ・苛立ち(25.0%)と回答しました。

加齢や筋肉の衰えという、改善が難しいことが原因と伝えられ、患者さまは治療への期待や希望よりも、あきらめ、不安、悲しみ・苛立ちを感じている割合が高いことが示唆されました。

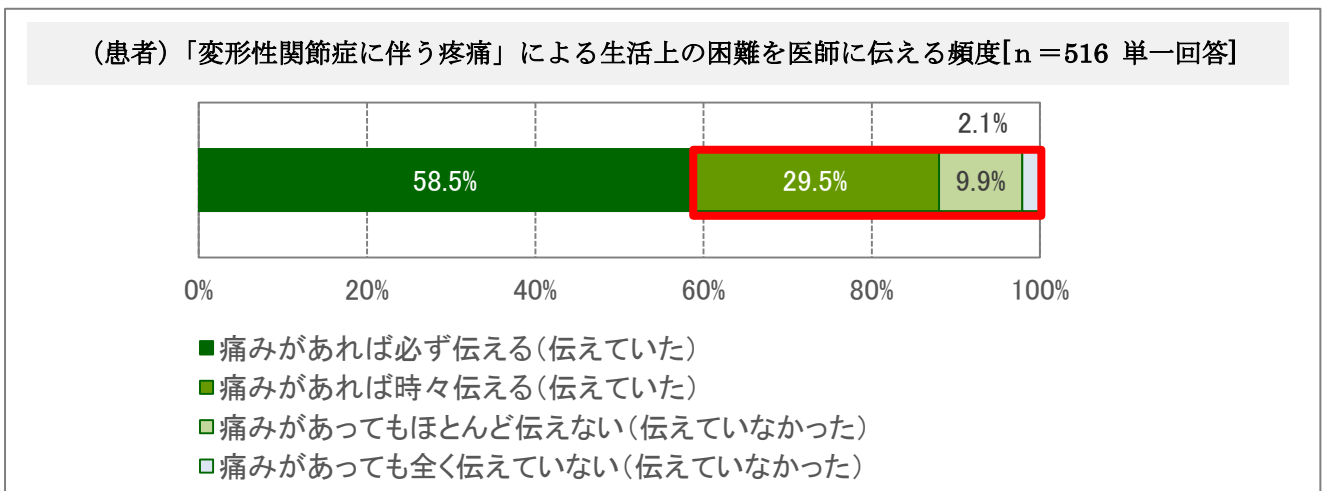


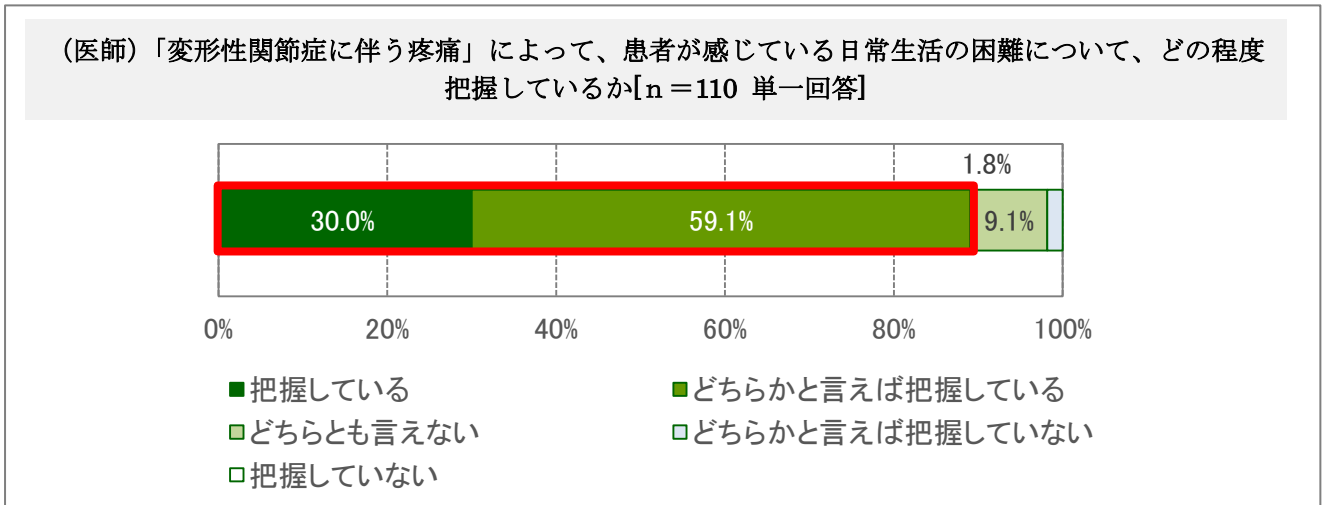
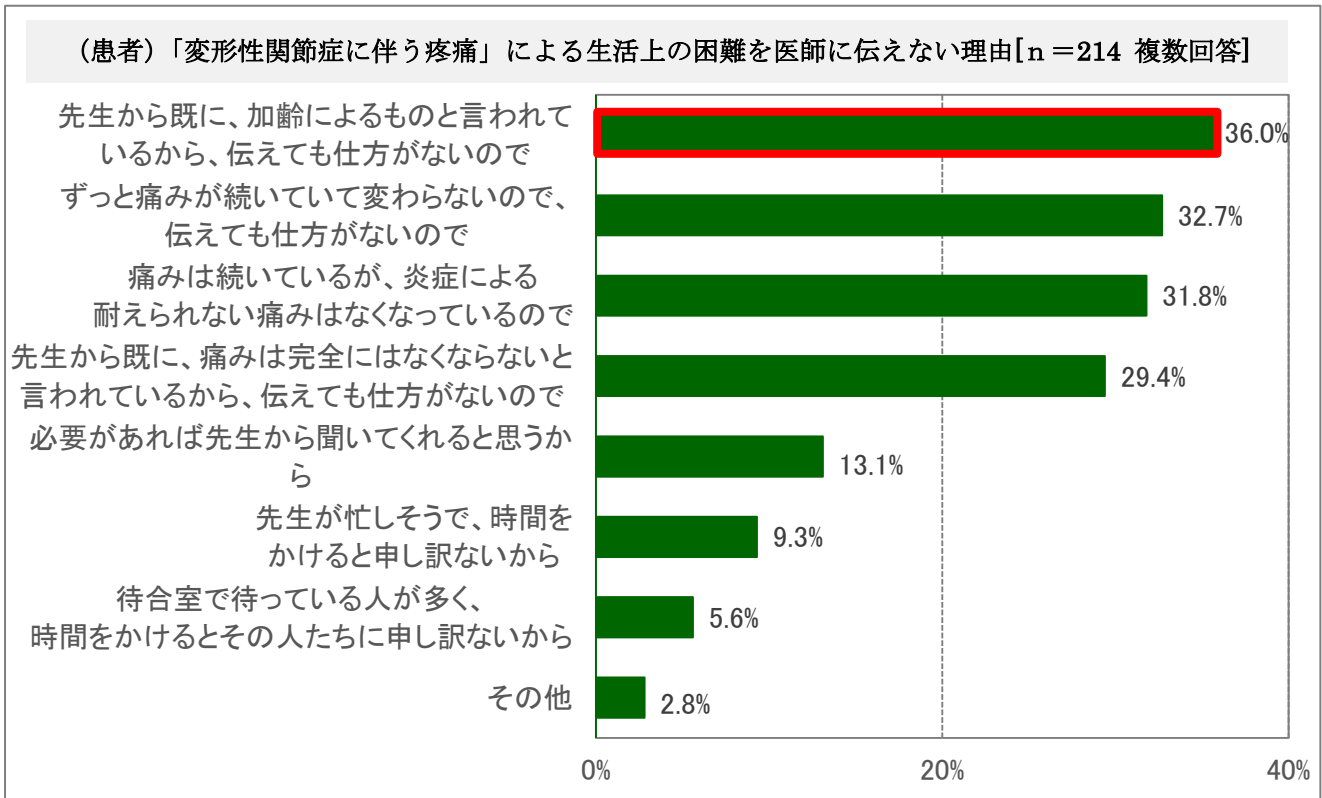


2-3. 痛みによる生活上の困難を医師へ伝えていないことがある患者が41.5%占めている、一方、医師は、89.1%が、痛みによる患者の日常生活の困難について把握していると回答—患者・医師の意識

「変形性関節症の痛みによる生活上の困難について、どの程度の頻度で先生に伝えていきますか」と尋ねると、58.5%の方が必ず伝えると回答し、41.5%の患者さまは、医師へ痛みによる生活上の困難について伝えていないことがあるようです。その理由は、痛みは加齢によるものと医師からすでに言われているから、伝えても仕方ない(36.0%)が最も多い回答でした。

一方、医師に「変形性関節症による痛みにより感じている日常生活の困難についてどの程度把握されていますか」と質問すると、89.1%が、「把握している」「どちらかと言えば把握している」と回答しました。





2-4. 長引く痛みの治療－41.5%の患者が1年以上通院、19.4%は3年以上通院

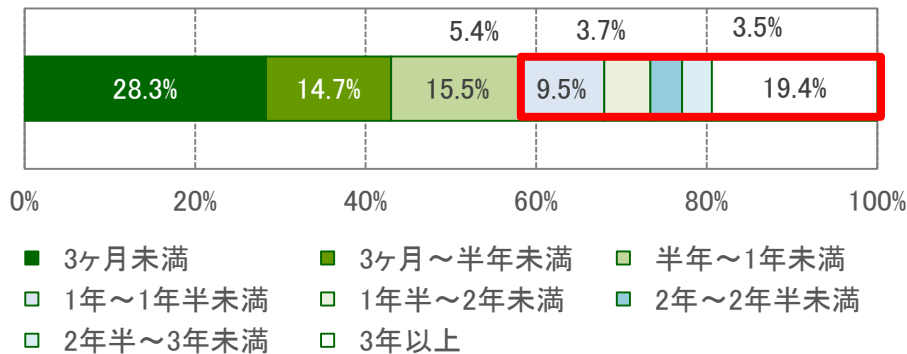
「変形性関節症に伴う痛みで医療機関を受診されてから、どの程度の期間通院していますか」と聞くと、41.5%が1年以上、19.4%は3年以上と回答しました。

その理由を質問すると、対処法によって痛みが一旦治まるが、一定の期間が過ぎるとまた痛みが出てくるから(38.8%)、対処法による効果がなかなか現れないから(33.6%)などと回答しました。

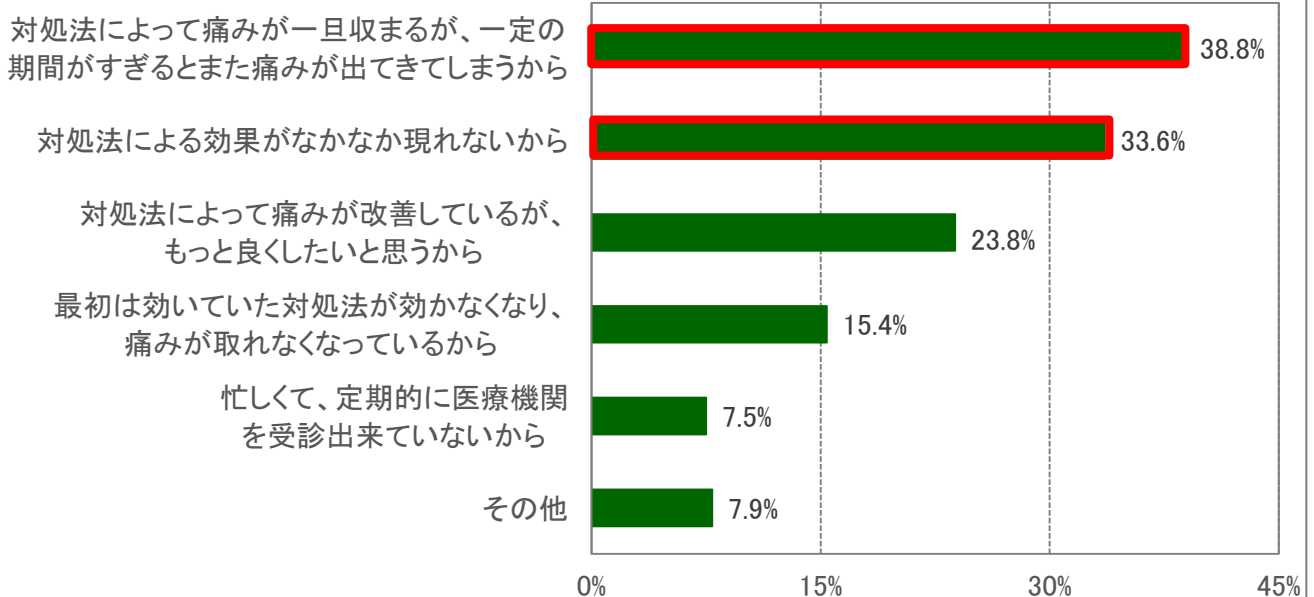
また、「治療によって、なかなか痛みが取り切れない理由について、医師からは何だと言われていましたか」と尋ねると、筋肉の衰え(52.3%)、加齢(44.4%)が主な回答でした。

痛みが再発する、治療効果がなかなか現れないなどの理由で、変形性関節症に伴う痛みの治療が長期化している患者さまが多いことが示唆されました。また、痛みの原因についても、加齢や筋肉の衰えと医師から伝えられている患者さまが多いことが示唆されました。

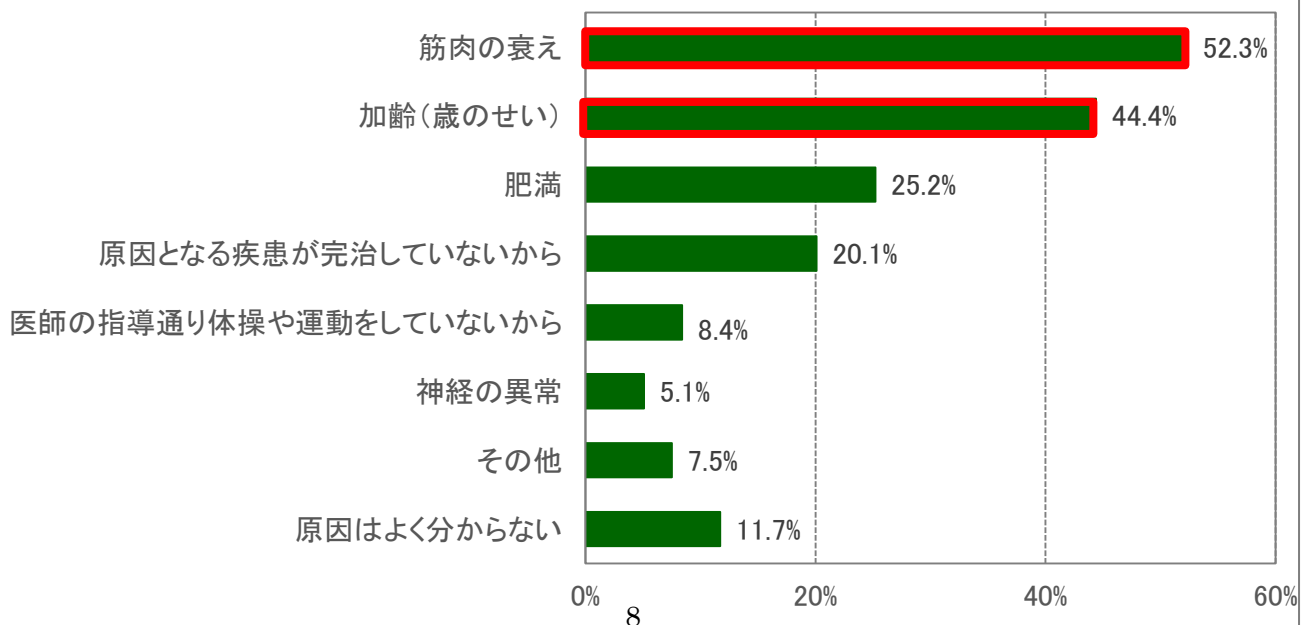
(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」による通院期間[n = 516 単一回答]



(患者)「変形性関節症に伴う疼痛」の治療が長期に及んでいる理由[n = 214 複数回答]



(患者) 医師から言われた「変形性関節症に伴う疼痛」が取り切れない理由[n = 214 複数回答]



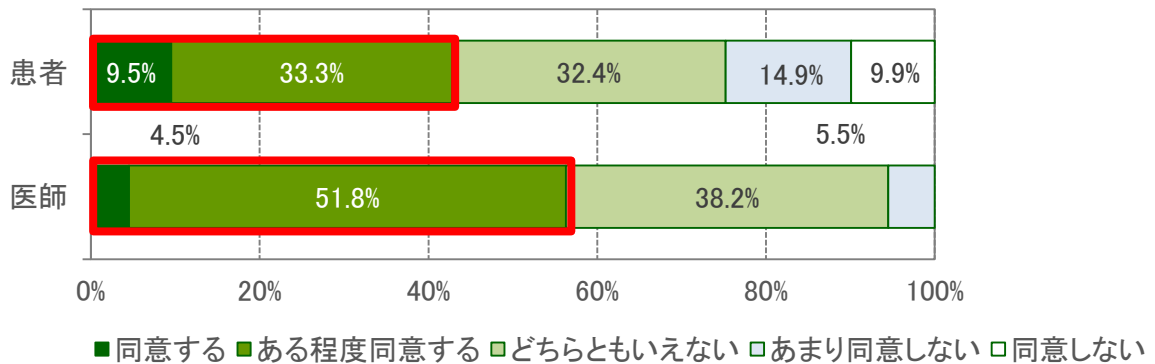
3. [変形性関節症に伴う痛みへの治療に関する患者と医師の意識]

3-1. 治療状況に対する患者の満足度－医師は56.3%が満足していると回答、患者自身は42.8%が満足

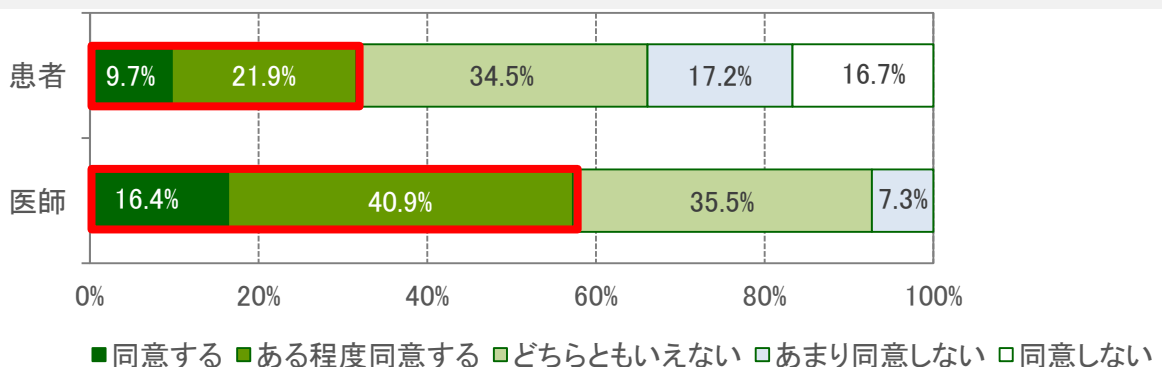
変形性関節症に伴う痛みに対する、現在の治療状況への患者さまの満足度を尋ねると、医師は、治療状況に満足していることに56.3%が「同意する」「ある程度同意する」と回答、一方、患者さまは治療状況に満足していると42.8%が「同意する」「ある程度同意する」と回答しました。

「患者さんと話し合い、治療におけるゴールを設定していますか」との問いには医師の57.3%が「同意する」「ある程度同意する」と回答、一方、患者さまに「医師と話し合い、治療におけるゴールを設定しましたか」と質問すると31.6%が「同意する」「ある程度同意する」と回答しました。

(患者) 「変形性関節症に伴う疼痛」に対する現在の治療状況へ満足している [n = 516 単一回答]
 (医師) 「変形性関節症に伴う疼痛」に対する現在の治療状況へ患者は満足している [n = 110 単一回答]

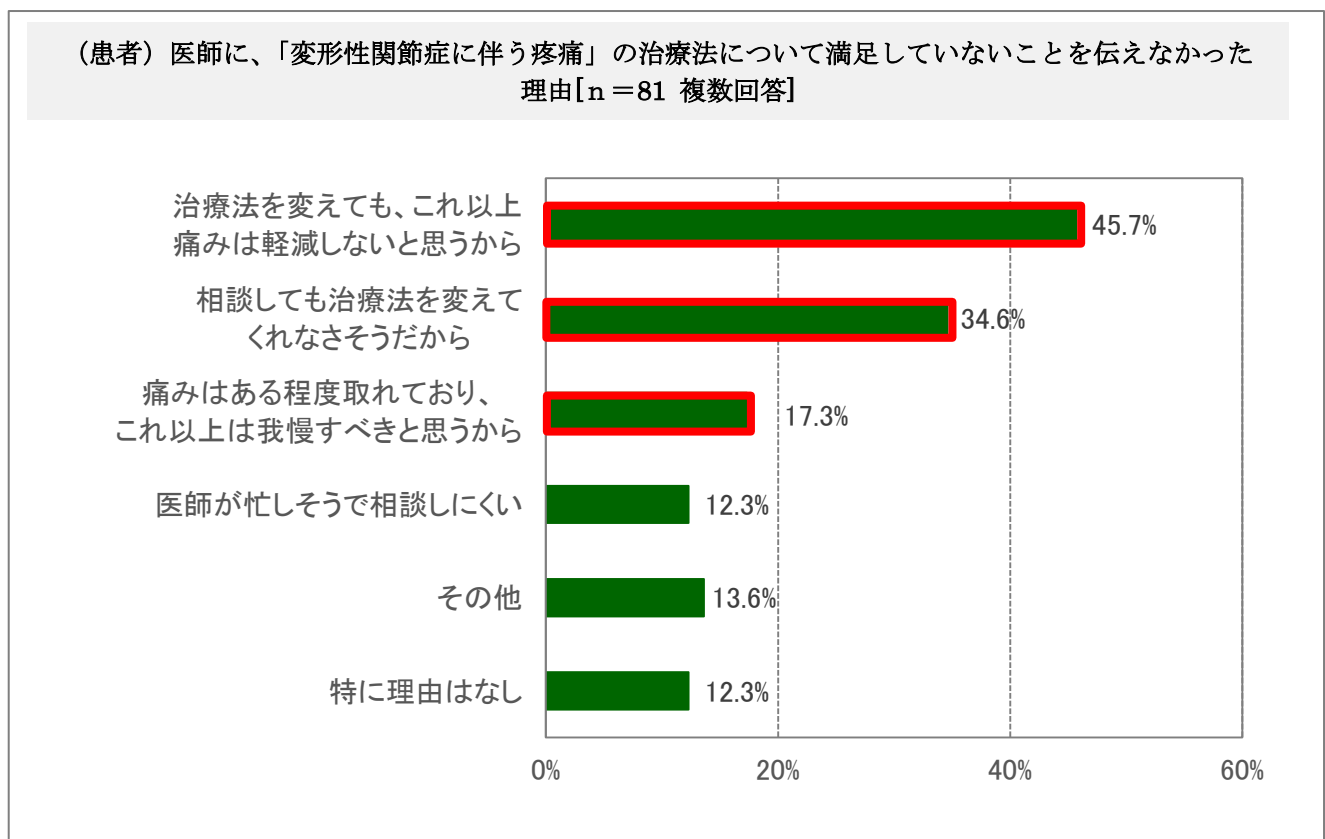
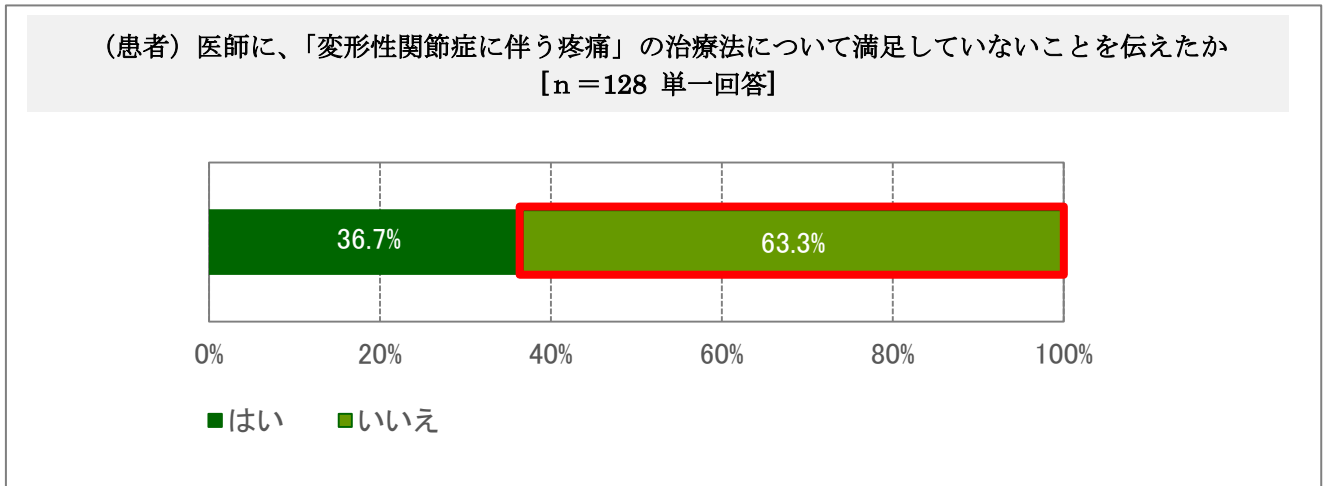


(患者) 医師と話し合い、治療におけるゴールを設定した [n = 516 単一回答]
 (医師) 患者さんと話し合い、治療におけるゴールを設定している [n = 110 単一回答]



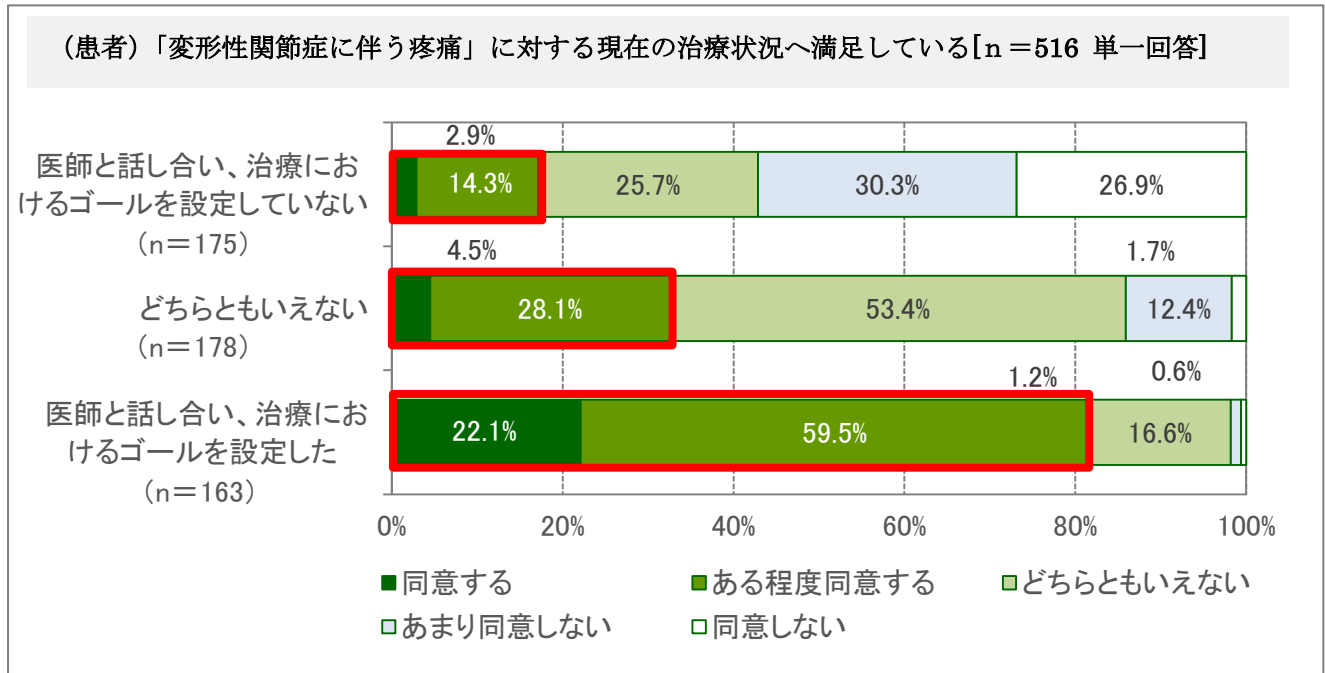
3-2. 現在の治療状況に満足していない患者の63.3%が、医師に伝えていない実態～主な理由は「これ以上痛みは軽減しない」、「治療法を変えてくれなさそう」、「これ以上は我慢すべきと思うから」

現在の治療状況に満足していないと回答した患者さまの63.3%が、満足していないことを医師に伝えていないことがわかりました。その理由は、治療法を変えても、これ以上痛みは軽減しないと思うから(45.7%)や、相談しても治療法を変えてくれなさそうだから(34.6%)という回答が多い結果でした。



3-3. 患者－医師間のコミュニケーションが患者の治療満足度を高めるポイントとなる可能性－治療目標を設定した患者の治療満足度は81.6%

医師と話し合い、治療におけるゴールを設定したと回答した患者さまの変形性関節症に伴う痛みに対する現在の治療状況への満足度は81.6%でした。一方、治療目標を設定していないと回答した患者さまでは、満足度は17.2%にとどまっていることから、医師と患者でコミュニケーションが取れ、治療の方向性が明確になっていることが、治療満足度を高めるポイントとなる可能性が示唆されました。



調査概要

- 監 修：島根大学医学部 整形外科学教室 教授 内尾 祐司 先生
- 調 査 日：2016年12月2日～3日
- 対 象：変形性関節症患者さま516名
20歳以上男女(男性155名／女性361名)
医療機関で変形性関節症と診断され、現在治療中または治療を行っていた方
医療機関を受診した際、変形性関節症による痛みの症状が膝にあった方
変形性関節症の治療経験のある整形外科医110名
- 地 域：全国
- 調査方法：インターネットアンケート調査(実査は株式会社マクロミルに委託)

以 上

塩野義製薬株式会社について

塩野義製薬は、「常に人々の健康を守るために必要な最もよい薬を提供する」という経営理念のもと、研究開発型の製薬企業として、患者さまに最もよい薬をグローバルに提供することに注力しています。感染症、疼痛・神経領域を研究開発の重点疾患領域とし、さらに、肥満・老年代謝性疾患や腫瘍・免疫疾患など、新たな疾患領域の研究開発にも取り組んでいます。塩野義製薬は、これらの疾患領域における革新的新薬の提供を通じて、世界中の皆さまの健康とQOLの改善に貢献してまいります。詳細はホームページをご覧ください。<http://www.shionogi.co.jp>

日本イーライリリー株式会社について

日本イーライリリー株式会社は、米国イーライリリー・アンド・カンパニーの子会社で、人々がより長く、より健康で、充実した生活を実現できるよう革新的な医薬品の開発・製造・輸入・販売を通じて日本の医療に貢献しています。統合失調症、うつ、双極性障害、注意欠如・多動症(AD/HD)、疼痛、がん(非小細胞肺癌、膵がん、胆道がん、悪性胸膜中皮腫、尿路上皮がん、乳がん、卵巣がん、悪性リンパ腫、胃がん、結腸・直腸がん)、糖尿病、成長障害、骨粗鬆症、乾癬などの治療薬を提供しています。また、アルツハイマー型認知症、関節リウマチなどの診断薬・治療薬の開発を行っています。詳細はウェブサイトをご覧ください。<http://www.lilly.co.jp>

〔お問合せ先〕

塩野義製薬株式会社 広報部

TEL:06-6209-7885 FAX:06-6229-9596